

詩人 サトウ・ハチローの翼賛ぶりを紹介します。

1932年7月、ロサンゼルスオリンピック陸上三段跳びの場面の放送を聞きながら (『内は現地からのアナウンス)

『一等南部忠平君 (日本) 記録は15メートル72、オリンピック並びに世界新記録。二等スヴェンソン……』

もうどうでもいい、スヴェンソンも何もあるものか、南部が勝ったのだ、勝ったのだ。

『いま、するするとマスト高く日章旗があがりました』

バンザイ、僕だって唄うぞ君が代を、君が代を。

『つづいてスエーデンの旗、次に又日本の旗、南部、大島両君は、直立不動ビクトリー・マストの日章旗を仰いでいます』

僕は目に浮かぶ、同胞の歓喜のさまが、歓呼の聲が。

優勝した南部は、何百というカメラにかこまれた。トーキー会社は南部をカメラの前に立たした。

『どうか一言おっしゃって下さい』

南部は何と言ったか。

『只今、南部忠平優勝いたしました』

この言葉をよく聞け諸君、この言葉は南部が、いかに国を愛しているか、いかに陛下のよき民であるかをはっきりとしめすものである。

『只今、南部忠平優勝いたしました』

誰に報告しているのであろうか。

天皇陛下へである。そうして、日本国民へである。

そうして、その後に大きな声で

『日本万歳』と言ったそうである。

南部!!! 僕の南部、日本の南部、世界の南部、僕は君を愛する。僕は君の友情と優勝に感謝する。僕は日本の詩人として、君の美しい友情と優勝を、讃歌となすつとめを持つ。」

1932、少年倶楽部10月号、南部の優勝を聞く サトウ・ハチロー